

➤スターリンに抑圧されたソ連圏エスペラント界

戦後の冷戦時代、大国ソ連を支配していたのはスターリンでした。ロシア革命の指導者レーニンの死後、スターリンとトロツキーは後継路線を巡って激しい闘いを演じました。トロツキーは、社会主義は一国で成し遂げられるものではない、世界革命の過程の中で進むものであるという世界革命論を唱えて、スターリンの一国社会主義論と政治的な対立を生み出しました。しかし、文学や芸術論にも造詣が深いトロツキーはスターリンに敗れ、国外に追放されました。亡命先を転々とせざるを得なかったトロツキーは、最後の亡命の地メキシコでも言論でスターリンとの闘いを続けていましたが遂に、スターリンが放った刺客によって殺害されました。

スターリンは政敵をことごとく葬り、冷血な独裁者として君臨し、思想面でも抑圧的な体制を築きました。1950年6月、スターリンは、ロシアナショナリズムを鼓吹し、『言語学におけるマルクス主義について』という論文を発表しました。そしてソ連のロシア語学者たちは「ロシア語を学べ！ロシア語だけがただひとつの世界語になるだろう」と主張しました。

ソ連や東欧圏の“社会主義国”のエスペランティストたちは弾圧されました。日本のエスペランティストたちと文通していた東欧圏のエスペランティストたちは、「手紙を送らないでくれ」と警告してきました。

しかし、そのスターリンも1953年、亡くなりました。そして1956年、党第一書記フルシチョフの党大会での秘密報告でスターリンの罪状が告発されました。圧政からやっと解放されたソ連東欧圏では抑圧されてきたエスペラント運動が復活しました。その功績に貢献したのがMEM(世界平和工

スペラント運動)でした。そのMEMの日本支部が1957年3月に発足し、機関誌『パーツォ(PACO)』を発行しました。会員は54人。名古屋にいた由比はMEM日本支部長を引き受け、『パーツォ』の編集発行に携わりました。

➤ソ連を告発した由比

由比の大陸での体験が強く出た、あるエピソードを紹介しましょう。スターリンの罪状が明らかになっても当時、日本のいわゆる進歩的な陣営にいたと思われていた人たちの間では、ソ連は進歩的な国に見られていました。

1961年、富山で開催された日本エスペラント大会でのMEMの分科会で、ある人が「平和の敵を規定せよ」と迫り、アメリカ帝国主義を批判しました。それに対して由比は、「ソ連もまた帝国主義国家である」と明確に発言しました。

1960年代半ばまで、ソ連が核実験を強行した時、日本の左翼陣営は「アメリカ帝国主義の核実験とソ連のそれとは違う」という意味合いでソ連を擁護し、分裂した状態を作りだしました。

このような状況下で由比は、ソ連を告発したのです。それこそ大陸での苦い体験から出たものでした。

1945年8月9日、旧満洲に突如侵攻してきたソ連は、日本の壮年の男たちをシベリアに連れて過酷な労働をさせ、また

婦人たちを凌辱し、工場の機械などをソ連に持ち去りました。由比は満洲でのソ連支配下の実態を肌で知っていました。その苦い体験に裏打ちされた「ソ連帝国主義」という表現になったのでしょうか。

ソ連の核実験は、アメリカ帝国主義に対する防衛的なものであるとして、左翼陣営がしばしば、それを擁護していた状況での由比の発言はすこぶる勇気があり、また鋭いものであったと言えるでしょう。由比は一部の人たちから「反動分子」と言

混迷の時代を拓くザメンホフの人類主義「私は人類の一員だ」
第十四回 由比忠之進の世界平和への闘い

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓(おおるい よしひろ)

われたようです。

エスペランティスト星田淳は、「由比さんの発言は当時としては相当勇気のいるものだった。ソ連も帝国主義と思っている人は多かっただろうが、集会など公の場で発言する者はいなかった。当時は“きれいな原爆”という言葉さえあった時代である」と話しています。

▶ 原爆被災者を支援した由比

由比はMEMの活動に力を入れ、当初54人だった会員は130人まで増えました。その頃の由比の様子をエスペランティストの阿部祈美は、「由比さんは、東京で失敗したと伝えられていた世界平和エスペラント運動だったが、名古屋の自宅で特許弁理士の仕事をしながら引き受けておられた。機関誌の『パーツォ』ひとつ出すためにも大きな努力が払われている現状の中で、日本支部は、ともかく機関誌を定期的に出して各国を感心させていた」と書いています。

ちなみに阿部さんとは私も若い時代、親しくお付き合いをしていたのですが、2013年10月、40年ぶりかで横浜の自宅で阿部さんにお会いしました。その一か月後、阿部さんは黄泉の国に旅立ちました。

私が阿部さんと同じように親しくしていただいたエスペランティストに、この拙文に何度も登場している伊東三郎さんがいます。伊東さんはオランダのロッテルダムで開催された世界エスペラント大会に参加する際、「大会で原爆被災者の援助について強調したい」と由比に話した時、由比は以前から続けている被災者を支援する折鶴ブローチを世界のエスペランティストに売るように提案したことが由比の1967年6月15日の日記に記されています。

伊東三郎・公子夫妻が世界大会で原爆の悲惨さを訴え、被爆者へのカンパを求めるという伊東夫妻は、由比の自宅を訪問しました。由比はそれを喜び、原爆犠牲者に関する写真説明をエスペラント訳にという伊東の依頼に応えました。

▶ 由比を導いた人類人主義

由比は『パーツォ』に原爆に関する原稿を多く書きました。とりわけ被爆者への思いが強く、被爆者がどれだけ長い忍従の生活を強いられていたか、原爆反対運動などの行動を起こすのにもどれだけ勇気がいったかなど、被爆者の思いにいつも寄り添っていました。

由比は世界のエスペランティストに被爆の実態を伝えるため、日本国内のエスペランティストに被爆実態のスライドを購入させ、エスペラントの紹介文を添えて送っています。

機関誌『エスペラント』に由比が出したスライドの広告文にはこう書かれています。

「あなた方の努力で世界中に原水爆の残虐性と恐ろしさを広めていくことができます。しかし、力のある国では相変わらず、核兵器の製造を止めず、核実験を繰り返しています。核兵器の恐ろしさを他国の無関心な人々に知らせ、彼らをして活発な運動へ参加させていくことは、日本の平和運動家の責務です」

伊東三郎は由比を、「広島、長崎の原爆被災者に対しても自分の苦痛と感じ、自分に責任があると感じて熱心に原爆禁止、被爆者救済の運動に加わり、エスペラントの特技を生かして、世界平和エスペラント運動の日本代表として全世界に呼びかけ続けた」と記しています。

エスペランティスト宮本正男は、「由比の一貫した思想は、ホマラニスム(大類注:人類人主義)であった。由比の、いわば、未熟な思想を一定の党派に結びつけたがるのは、どう考えてみても、由比に対する冒とくである。由比はもう少し、かれらよりも背が高かった。由比からわれわれが学びとらねばならないものは、その非党派的超党派的平和愛好精神と、千万人といえども我行かんという気概であり、その行動である」と書いています。

■本稿は比嘉康文著、『我が身は炎となりて』新星出版(2011)。また『宮本正男作品集』日本エスペラント図書刊行会(1993)。に拠っています。